



朝倉

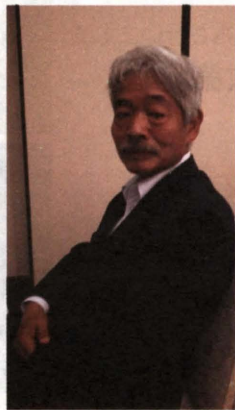
医療NGOペシャワールの会

現地代表 PMS総院長 中村哲氏に聞く

朝倉の山田堰が

アフガンの大地を潤した

▲医療NGOペシャワールの会
現地代表 PMS総院長中村哲氏



活かされています。干ばつにも洪水にも強いこの構造をモデルにしようと思いました。コンクリートではなく、石を鉄線の籠に詰めた蛇籠で護岸工事をし、柳を植えて補強します。自然の力を活かした昔の人の知恵です。

初め、住民は本当に水がくるのか？と、疑いの気持ちでした。重機が無く、頼るのは自分達の手。自分達の昔からのやり方で、自分達でつくる…。

アフガニスタンの国土は日本の1.7倍ありますが、その八割は山です。雨はほとんど降らず、雨量は年間300ミリ。水源は雪です。それでも農業を営んでいます、本来は90%以上の穀物自給率があったのです。国民の100%近くがイスラム教徒で、モスクでは礼拝が行われ自治が強力です。

『今必要なのは爆弾ではなくパンと水』を訴えながら、私達は2003年に『緑の大地計画』を打ち出しました。百の診療所より二本の用水路が必要なのです。しかし、近代的な道具はありません。

18年前の2000年から干ばつにみまわれ食糧不足となり、栄養失調、チフス、赤痢などで亡くなるという激烈な被害に遭いました。葉がいくらあつても飢えや乾きは治せません。まず清潔な水と食物が必要なのです。

アフガニスタンと日本との共通点は、山と平地の距離が短いこと。山あいの農業を営んでいること。注目したのは朝倉市の山田堰です。筑後川に斜めにつくられた

堰。230年位前につくられたのに今も

そうしてとうとうアフガン東部九箇所に山田堰とそっくりの取水堰をつくりました。2009年には24キロの用水路が完成。『これで俺たちは生きていける！』と、人々は喜びました。現在、二万六千ヘクタールの農地が回復。この15年間、住民との一体感を感じます。

人々の願いは、一日三回ご飯を食べること。家族と一緒に生活できること。それが今叶えられています。

新しいものが良いとは限らないのです。山田堰に見る昔ながらの技術は素晴らしいものです。

そこで、荒れた国土を何とかしようと、